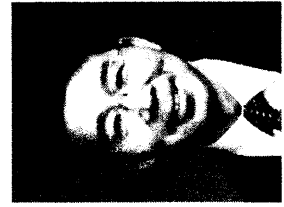


マッカーサーと ニー・ビズケット



よしむら かずなり
吉村 和就

(グローバルウォータージャパン 代表)
国連学芸アカデミアバイザー
本気安楽陸戦略機構 技術普及委員長

先月、知人の紹介で第一生命保険株式会社の本社（東京・日比谷）に保存されている連合軍総司令部（GHQ）ダグラス・マッカーサー最高司令官の執務室を訪問した。広さ十六坪の部屋の真ん中に「引き出しのない机」があった。マッカーサー記念館のパンフレットによると「マッカーサーは何事にも即断即決し、引き出しがなかった」とある。またある資料によるとマッカーサーは「翌日に持ち越さない為に深夜まで残業し、山積になった書類を決裁していた」ともある。

GHQ最高司令官として活躍したマッカーサーの逸話の一つである。マッカーサーは着任以来、矢継ぎ早に多くの日本改造指令を出し、それを確実に実行させた。日本在任期間（一九四五年八月～一九五一年四月の約二千日）その命令内容や彼の功罪については、既に多くの人々により語られているので、今回は筆者のライフワークである「水と衛生の改善」について述べてみたい。

マッカーサーが打ち出した日本改革・改造指令

矢継ぎ早に打ち出された指令はあまりにも多い。陸海軍の解体と軍需工場の廃止、戦時中に要職にあった者の公職追放、治安維持法の撤廃、検閲制度の廃止、政治犯の釈放、財閥の解体、婦人参政権の授与、労働組合の奨励、農地改革、学校教育の自由化、公衆衛生の改善、新憲法の制定など、今までに無い大胆な改革を期限付きで可能にしたのはGHQ最高司令官として、天皇および日本政府より上の存在として日本を統治する絶対的な権力を有していたからである。

天皇陛下とマッカーサー元帥のどちらが大きな権力を持っているか？ 一目瞭然になったのは昭和二十年九月二十七日「天皇陛下とマッカーサーが初めて対面した時の写真」である。マッカーサーは開襟シャツに勲章も付けず、両手を腰に当て気楽な姿勢で、少しだけ肘を張り百八十三センチの長身から、あたかも天皇陛下を見下すように立っていたのに対し、天皇陛下は正式礼装のモーニング姿で緊張して立っていた姿だ。戦前より天皇陛下は神と同様の存在であり、行幸の時も直接その姿を見てはいけないと教育されてきた日本国民にとり、この写真は日本の完璧な敗北とマッカーサー元帥の絶対的な支配権を実感させるものであった。

映像と言葉の魔術師だったマッカーサー元帥

マッカーサーは映像と言葉で、兵隊や民衆の心を掴んだ魔術師である。映像（写真）の活用には人一倍気を使っていた。一九四一年、フィリピンに駐屯するアメリカ軍の総司令部の時は専属カメラマンを寵愛し、その勇姿を何回も撮らせベストショットを本国やマスコミに提供していた。

では日本への着任時はどうであったか。昭和二十年八月三十日午前、マッカーサーは先陣と

して、千人を超える米国将校や、連合軍各国の報道関係者百二十人を乗せた大型輸送機を厚木基地に飛来させた。彼らは午後からの連合軍最高司令官の受け入れ準備に忙殺された。午後二時五分、最高司令官専用機は沖縄経由で厚木飛行場に到着した。タラップが自動的に降り、コーンパイプをくわえ、サングラス姿のマッカーサー最高司令官・日本到着の姿である。この写真は世界中に配信された。世界中の人々は、日本が降伏してから二週間、誰もがテロや暗殺の危険性がある日本にどう最高司令官が着任するか固唾をのんで注目していた中、丸腰でコーンパイプをくわえ遠くを見るように自信に満ちた足取りでタラップを降りるマッカーサーの姿はまさに英雄の姿であった。

演説に使われた「民衆の心に残る言葉」もよく練られている。マッカーサーがフィリピンの戦いに敗北し、撤退するときに残した言葉「私は必ず戻ってくる」(I Shall return)は繰り返し使われマスコミの常用するところになった。日本人には「必ず任務を遂行する」と良い意味に解釈されることが多いが、米国人に聞くと「敵前逃亡」の意味で使われることも多いらしい。最も有名な言葉は「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」である。マッカーサーは朝鮮戦争が勃発すると国連軍総司令官に任じられ、不利な戦況を逆転したものの、戦争の戦略や遂行方針を巡ってトルーマン大統領と対立し解任された。それから十日後の一九五一年四月十九日、米上下両院の合同会議で行った演説の末尾の文言である。議会演説でマッカーサーはアジア太平洋の戦略的な情勢を踏まえ、共産化した中国がアジア地域諸国に及ぼす脅威をとうとうと論じ、「中国を攻略すべき」と訴えるとともに、深追いを避けて自分を解任したトルーマン大統領に嫌味たっぷりに反論すべく通常話すスピードの半分で「Old Soldiers never die, They just fade away」と雄弁に語ったのだ。米国人には、日本語的なマイナスのイメージはなく、「幾多の激しい戦いを潜り抜けてきた兵は決して死ぬことは無い、与えられた任務を完璧に果たし、すべ

てを見届け、静かに舞台から退場する特権を得た」と解釈されている。

食品衛生の改善

・昭和二十年頃の日本の衛生状態

明治以来、日本の食品衛生は警察の業務であった。衛生警察の仕事は、命に直結する食品衛生を指導し取り締まることにあった。戦局の悪化とともに地方自治体の業務に移管されていたGHQは警察組織の改革を指令し、食品衛生の業務を厚生省に移管し、直ちに新たな食品衛生法を制定させたのである。

その背景の一つに、占領軍として日本に来た若い水兵が、銀座のアメリカ赤十字クラブ(バンカーズ・クラブ)で毎晩深酒をしていたある日、二日酔いのために、両手で頭を抱え座っていたが、ふと彼は両手を頭から離し、目を開いたところ周りの情景が見えないことに気づき愕然として泣き叫んだ。彼の呼気からギ酸臭が漂い、数日前に飲んだ粗悪な酒に含まれていたメチルアルコール(メタノール)による失明が避けられない状態であった。メチルアルコール入り飲料は「目が散る」と言われていたが、市中に多く出回り、多くの酒飲みが失明している。(一九四六年の死者:二千人を越えた)このような事件を防ぐために、GHQは米兵に米国製アルコール飲料を提供し、日本側には有害飲食物の取締令を制定するように指令した。この法律はメチルアルコールと四エチル鉛を含む食品を厳重に取り締まるもので、それらの含有物の販売製造はもとより、食品に供する目的で所持しただけでも罰せられた。世界でも厳しい食品衛生法の始まりである。

ハニー・バスケット

もう一つはし尿処理の改善であった。江戸時代から野菜は人の糞尿を肥料として育てられていた。農民は江戸に出向きお屋敷から糞尿を集め、天秤棒で糞尿桶をかつぎ畑地に運び肥溜めを作り、約一年間寝かせて発酵させてから肥料として使用していた。マッカーサーはGHQ本部から日比谷通りを眺めいたとき、不思議な光景を目にした。皇居前を、桶を天秤棒で担いで行く人を見て、「あれはなんだ？ 何を運んでいるのか？ 調べる」。

米国にはない光景に驚いたのであった。街中の米兵も同じであった。桶の中を調べるとドロドロの黄色い液体と鼻をふさぐ異様な臭いで卒倒しそうであった。再度見かけると米兵は「ハニー・バスケット」だと叫び逃げ出したのであった。戦中から化学肥料を手でできなかった農家は、食料増産の掛け声で三か月位しか糞尿を発酵させることができず、直ちに肥料として使わざるを得なかったのである。その結果、国民の七割は回虫や蟯虫、十二指腸虫などに苦しめられたのであった。なぜならそれらの寄生虫やウイルスは糞尿の中でも半年は生存するので、時間をかけ十分に高温発酵させ死滅させることが必要であった。マッカーサーは直ちに「ハニー・バスケットの運搬」を禁止し、近代的な「し尿の機械的な汲み取り」と「し尿の科学的衛生処理」を命じた。しかし長年続けてきた収集方法は簡単には変わらない。日本国内で生産される野菜などは既に寄生虫に汚染されているので、進駐軍の高官向け野菜は、調布などの占領軍専用水耕農場で生産されたレタスを使うようになり、寄生虫の恐怖から解放されたのであった（農場は一九四六年完成）。

戦後公開されたGHQ覚書（SCAPIN 48、昭和二十年九月二十二日指令）には、連合国最高司令官として日本政府に対し次の処置をとることを命令している。厚生省は直ちに疾病

状況、医師と医療施設数、伝染病の報告をすること、上水道、下水道のインフラ整備及び汚物処理の早急なる処置をとれ、花柳病（性病）の撲滅などである。衛生観念に敏感だったマッカーサーは、本国よりDDTを大量に入手し、日本人の頭にコップ一杯分のDDTをふり掛けノミヤシラミ、多くの伝染病を防いだのであった。もちろん水道水の塩素滅菌も徹底させている。

第二次世界大戦中のし尿処理

昭和十八年には戦局が急迫し、若い者は根こそぎ召集されし尿の収集・運搬は行き詰まった。糞尿は庭に埋められるか、夜陰に乗じて側溝や川などに捨てられ、その結果、日本国中に水系伝染病（赤痢、腸チフスなど）が蔓延していた。昭和二十年GHQの命令で資源調査会が「し尿の機械的なくみ取り方式」や「し尿の化学的な処理方法の検討」さらに日本独特の「嫌気性消化法によるし尿処理法」を政府に勧告し、現在のし尿処理施設や、下水道処理施設の拡大に繋がった。マッカーサーの勧告指令により、日本の上下水道処理施設は大きく進展し世界に冠たる衛生状態の良い国になったのである。

日本分割論に強硬に反対したマッカーサー

スターリンは日本分割論を強硬に主張していた。北海道・東北はソ連が統治し、関東から関西までをアメリカ、中部・九州をイギリス、四国を中国が統治する分割論だ（その他様々な提案がなされた）「それをやるなら原爆を使う」と分割論に強硬に反対したのがマッカーサーである。歴史にモシは禁物だが、もし分割統治が実現していたら、日本はとんでもない分断国家となっていたであろう。